

走れるから走るだけ

鈴木颯手

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある場所にとある男性がいました。その男性はある日突然交通事故で亡くなってしまいました。それを哀れんだ神様は男性に転生のチャンスを与える事にしました。その時、男性は転生の特典として望みました。

「すべての技術を吸収し、自分の糧に出来る最強の者になりたい」

しかし、男の転生先に当てはめればあまりにも強大過ぎる力です。この力を特典として持つていけば男性の記憶と自我を捨てないといけません。それでは何のための転生なのかわかりません。それでも男性は望みました。

「これだけの力があれば何でもできる。人生の勝ち組になれる」

神様は渋々受け入れて男性を転生させました。転生先となったウマ娘世界のウマ娘として。

こうして男性、いえ女性には強大な力を授かって転生しました。しかし、それが良いことだと感じるには特典はあまりにも強力過ぎました。

これはあまりにも強大過ぎる力を身に宿したためにウマ娘の本能すら消え失せてしまった一人の少女の物語です。

目次

第一話「黒い皇帝」	1
第二話「不審者」	9
第三話「人間とウマ娘」	17
第四話「接触」	26
第五話「出会い」	38
第六話「ハルウララ」	45
第七話「衝撃」	52

第一話「黒い皇帝」

薄暗い会場内に響き渡る歓声。それらを無視して私はスポットライトで照らされた7つのゲート、その中の右から3番目に入る。隣にはすでに入っていた同族が緊張した様子で前を見ている。

この「ウマ娘」は勝てない。見ればわかる。

いつからだろうか。備わっていたこの力で私は隣のウマ娘のスペックを瞬時に理解した。レースに出れば運が良くて3着。平均でブービーが良いところのレベルだ。

とはいえ私のようなイレギュラーを除けばここにいるのはそんな者たちばかりだ。自分の才能では勝てない者たちが最終的にたどりつく数あるレースの中でも最下層のクソのようなレース。それがここの違法レース場だ。

妨害さえしなければなんでもあり。違法ドラッグを使おうとサポーターを使おうと問題ない。一部には身体障害者が機械の力を借りてウマ娘とは思えない速度を出すやつもいたらしい。

そして、そんなレースに出場する私たちを観客たちは酒の肴にしている。中にはこのレースの主催者が行っている賭け事を行う者もいる。というかここの観客のほとんど

は行っている。違法レース場で行われているだけありレースの賭け事は違法だ。ウマ娘という人権を保障された種族を賭けの対象とするなど人間として恥ずべき行為である為らしい。だけど私にとって……いえ、このレースに参加するウマ娘すべてがその賭け事を推奨している。当たり前だ。私たちはレースに勝てばその賭け金の一部を褒賞として受け取る事が出来るからだ。比率は主催者側に最終的に残った賭け金の1割。少ないと思うかもしれないがこの観客はみな金持ちばかりだ。レース一つで億近い金額が普通に飛び交うのだ。そんな中の1割だ。一般人では手が届かないような高額となっている。更に一部には海外から視聴している者もいて電子マネーを使って賭けていることもあり、現ナマに加えて膨れ上がる事もある。

もちろんこの褒章は一着限定だ。だからみんななんとしても勝とうとしているのがそんなことを私はほしくない。ただ走ればそれで勝てるから。

パーン!!

スターターピストルの音が聞こえると同時に私は走り出す。どうやら先頭に躍り出たように目の前には誰もいないし後方から6人分の気配がする。先頭に立って走ることを逃げというらしいが今の私はその中でも2番手以降を大きく引き離している大逃げに分類されるだろう。そう、私は既に序盤にも関わらず2番手以降を突き放している。後方のウマ娘が驚いているのが感じられるがそれはいつもの事だ。とは言え今日

は久しぶりに大逃げを披露した。そうである以上私は自分の限界を見極めるためにもこのまま速度を上げ続けようと思う。周囲の景色が一瞬で切り替わっていく。まるで車で高速道路に乗っているかのような風景だ。

『一着、シユバルツカイザー』

気づけばゴールを踏んでいたようでそんなアナウンスが聞こえてくる。私は速度を落とすつつ後ろを見れば……、ああ。どれだけ突き放したのだろうか。みんな半分を超えたあたりだった。特に一番後ろのウマ娘なんて目に涙を浮かべて絶望の表情を浮かべている。それでも走るのをやめないあたりさすがはウマ娘といべきか。

『2着——、3着——……』

次々とゴールを果たして順位を読み上げられていくがこのレースにおいて一着以下は必要ない。一着という一人の勝者とそれ以外の敗北者、それがこのレースで観客が求めていくものだ。

『次のレースは一時間後に開催します。それまではどうぞご自由にお過ごしください』
アナウンスがそう締めくくり私たちのレースは終了する。普通のレースで行われているようなウイニングライブはここにはない。それが気に入って私はここにいる。高い褒章金を得られるという事もあるがやはり私はあれが嫌いだ。態々他者に媚びる必要などないだろう。

『一着の方は中央スタツフルームまでお越してください』

これも聞きなれたアナウンスだ。このアナウンスが流れる時にはすでに移動している。ともにレースを走ったウマ娘との交流？ 必要ないだろう。私はさつきと目当ての物を受け取つて帰りたいんだ。

「入るぞ」

スタツフルームについた私はノックもしないで入る。中には豪華そうなソファアーに二人の美女を侍らせた一人の男性が座っている。彼が向いている方向の壁には複数のテレビがつけられており、レース場の様子を様々な方向から見られるようになっていた。

「おおー！ お前さんか。褒賞金の用意は出来ているぞ。ほれ」

男、このレース場の主催者はそう言つて私にタブレットを見せてくる。ここのレース場で採用されているネットバンキングによる振り込みの様子だ。確かに高額な褒賞金が振り込まれているようだ。一着をとつたものの中には現ナマですべて受け取る者もいるらしいが私は大半をここに振り込むように言っている。

「それとこれがいつも通りのこんにやくだ」

こんにやく、つまり100万円が入った封筒を投げてくる。最初こそこれに怒りを覚えたが今となつては気にもしなくなつた。私も慌てることなく難なく受け止める。封筒の中身は確認しない。こんなレースをしているこいつだが金銭面では誠実だ。ピン

ハネなんてしないできつちり渡す金を渡してくる。逆にどれだけ媚を売ろうとも受け取った賭け金の一割を超える事もないがな。

「相変わらず化け物みたいにはえーな。しかも今日は久しぶりの大逃げとあつて観客たちも喜んでいたぜ」

「そう」

「ふ、観客に興味がないのも相変わらずだな。少しは笑顔を見せてやったらどうだ？
きれいな顔が台無しだぞ？」

「男に媚を売つて得があるか？」

「そりやねえな！ と主催者は豪快に笑う。さすがにここの主催者とだけあつて私の性格を理解している。おそらく両親や友人よりもな。」

「なら私は帰る。出場しても良いレースが来たら教えてくれ」

「おう。そんなときはまた頼むぞ！」

主催者のその言葉を聞きながら私はスタッフルームを後にする。今日はこれ以降の予定もない。久しぶりの大金でもあるしファミレスで豪遊するのもいいかもしれないな。

「……ほんとうに、相変わらずだよ」

主催者はウマ娘、シユバルツカイザーが出ていった扉を目を細めてみながらそう言った。先ほどまでとは違い刀の如き鋭い雰囲気を見せ、主催者と呼ぶにふさわしい風格を醸し出していった。

「ねえ？ あの娘、たまに来るみたいだけどトレセンには通っていないの？」

「ん？ ああ、それどころか高校すら通っていない」

「あら。それなら昼間は何をしているのかしら」

「このレースで稼いだ金を使って何かしているらしいぞ。詳しくは聞いていないから知らないがな」

両脇に侍らせた美女の質問に主催者は気前よく答える。久しぶりにシユバルツカイザーが参加するだけあって今回は大きく金が動いていた。ちなみに、シユバルツカイザーはこのレース場で全戦全勝という無敗の記録を持っているがゆえにその存在はウマ娘のゲートイン時まで伏せられている。というより出れば必ず勝利する彼女を賭ける事は出来ない。

「あいつは最低でも一月に一度、最高で一年に一度出すだけでこつちが大儲け出来る最高のカードだ。あいつのおかげで俺は金持ちどもから大金を巻き上げられるしあいつ

も一着の褒賞金を受け取れる。たぶん普通に出ていたんじやもらえない高額な金をな」
「Winwinの関係ってわけね？」

「そうだ。あいつが何をしようとしていても構わねえ。俺には関係ないからな。あいつは俺が金を巻き上げる時のジョーカーとして機能してくれればそれでいいのよ」

逆に言えば主催者はシユバルツカイザーの不利になるような事はしない。彼女がこのレース場に通っているのは単純に家から近いからだ。自分に不利だと感じれば別の違法レース場に通う事になるだろう。

「違法レース場の関係において金がどれだけあるかはステータスだ。あいつを他の所にとられるわけにはいかねえからな」

「でもいつかはトレセンに通ってしまふんじゃないかしら？」

「そんな心配はねえさー。あいつは自己中なんだよ。自分が好き。他人が嫌い。他人より自分を取る。自分が嫌な事は絶対にしないが自分の為になるなら他人に嫌なことを平然と行える。そして恐ろしいのはそれを行っても生活できる才能を持っていることだ。だからあいつはその気になれば同姓すら魅了できる顔を肉体を使った素晴らしいダンスも出来るが他人のためにそんな事はしたくないのさ。トレセンに通わねえのがそれが一番の原因さ」

「ああ、確かにやるものね。ウイニングライブ」

「そう考えればそういう風に取れるわね」

ウイニングライブとはレース後にウマ娘がファンのために行うサービスのようなのだがシユバルツカイザーはそれを媚を売っていると感じて忌避している。あれこそ他人のために自分が嫌なことをするという彼女にとって最悪なもの一種だからだ。

「だから俺がきちんと金を払い、あいつの住処の近くにおいて、ウイニングライブを開かねえ限りここを離れる事はないって事さ。……あ？」

そう言い切った主催者のタブレットに通知音が聞こえてくる。それは招かねざる者の到来を告げる通知音だった。

「つちー、ここも嗅ぎつけられたか。仕方ねえ。いつものように上下両方にレンガや座布団の力を見せてやるか」

主催者はそういううって笑う。裏の違法レース場界で輝く男は今後もその力で我が世の春を謳歌していくのだった。

第二話「不審者」

「つち、あまりいい光景じゃないな」

とある日の違法レース場。そこに潜入する事が出来たURAの職員は薄暗いレース場を見て顔をしかめた。しかし、だからと言って何もしないわけにはいかない。彼を潜入させるために既に1ダース近い人数が摘まみだされている。彼が今も違法レース場にいられるのはそう言った者たちの犠牲があつてこそなのだ。

だからこそこの違法レース場の証拠を少しでも多く確保しなければならなかった。職員は上着のポケットに手をつ込み、そこに仕掛けられた小型カメラで周囲の様子を撮影していく。堂々とトトカルチョが表示されているレース場上部の電光掲示板。誰が勝つか、どれだけ賭けたかを話あう観客たち。そして、レースに出場するウマ娘達。彼女たちには悪いがここが摘発されれば話を聞く必要が出てくるだろう。たとえどんな事情があろうとも違法レースに出ていた以上無罪というわけにはいかない。何かしらの罰則や注意が行くはずだ。

「ま、そんな程度で引くなら最初からレースに参加してないだろうがな」

職員はどうせ無意味に終わる行為だと脳内でつぶやく。悲しい事に違法レースに

手を染めたウマ娘の再犯率は8割を超えている。何しろここに来る者は何らかの理由、正規のレースでは勝てない、身体的障害を理由にトレセン学園に入學できないかった、今すぐにでもまとまった金が欲しい等栄光と名誉を必要としない者ばかりなのだ。

だからこそ違法レース場の数は減らないどころか増加の一途をたどっている。ウマ娘の数が増え、それだけ脱落者が増えている事が原因だった。増えるウマ娘に対して得られる栄誉は昔と変わらない数しかない。当然増えた分だけ脱落者は増加した。

「(何とかしないといけないだろうけど……)」

普通ならこんな違法レース場の摘発ではなく改革などをしていくべきなのかもしれないがレースを増やすくらいしか手を打てず、それすら増加するウマ娘全てを受け入れる事は出来ない。何より身体障害者はどうするのか？ 昔からほぼ存在しないだけに救い上げる事は不可能だ。加えて純粹に金が欲しい者はどうすればいいのか？ URAの予算だって無限ではない。施し等出来るはずがなかった。

レースの賞金が少ないのも問題なのだろうが若いうちから大金を得て金銭感覚が麻痺してしまわないようにという思惑とテレビの取材やグッズ販売などの副収入が許可されている以上そちらで金は得られるだろうというのがURAの考えだ。結果、レースで勝てれば大金が得られるという簡単な違法レース場に吸い寄せられる者は多かった。

「おっ？ そろそろか……」

職員はいよいよ始まるレースに意識を向ける。違法レース場だけありなんでもありの様相を見せている。身体障害者が義足をつけて普通より早く走ったり、ドラッグをキメて脳のリミッターを解除する等様々だ。

「……ん？ あれは……」

そんな中で職員は一人のウマ娘が目についた。全てを吸い込んでしまふような黒い髪に簡素なジャージの上からでも分かる鍛えられた肉体。何より立ち振る舞いが強者のそれだった。この場にはふさわしくない、表のレースでも勝ち残れる実力者だった。

「っ……これは……」

そして、そんな職員の予測は良い意味で裏切られた。強いのではない、強すぎるのだ。飛び出した瞬間には先頭に立ち、たった100m程で後方を大きく引き離す。後ろから必死に追い付こうとする者たちを一笑にするようにぐんぐん速度を上げていき、圧倒的な差で以てレースに勝利した。

『1着、シユバルツカイザー』

アナウンスを聞き職員はレースが終わった事に気付いた。呆然としてしまう程にそのウマ娘、シユヴァルツカイザーは強かった。それだけにこのレース場にいる事が残念で仕方なかった。彼女ほどの実力があればどんなレースも総なめするだろう。三冠なんて彼女にかかれば簡単に採ってしまえる。そう思わせる実力があったのだ。

「……一度声をかけてみよう」

職員は決意した。彼女をこの違法レース場が救いだし、本当に輝ける場所に連れて行く。そのためにもここを潰さないといけない。職員は覚悟を決めた表情でレース場を後にした。

さて、久しぶりの大金だがこれをいつぺんに使ってしまうような事はしない。日々の生活費を除き残りは将来の為に貯金する。いずれ歳をとり、走れなくなつた時に備えておく。老後用の貯蓄というやつだ。別に私は走る事以外でも才能を持っているからその気になれば稼げるが万が一という可能性もあるからな。

そんな私のルーティンは朝に起床。昼までに軽くランニングをこなし午後からは自由時間、散歩やシヨッピングをするか家でネットサーフィンをしている。そして夜は早めに寝る。それが私の何もない日の一日だ。レースなどがあればこんな風には出来ないがそうじゃないならずっとこれの繰り返しだ。中学は卒業したが高校には通う気になれずに通っていない。両親は中学卒業前に病死して天涯孤独の身だ。

なので今日も日課となつた家の近くのシヨッピングモールに来ている。ちなみに家

は平屋の一軒家だ。両親が残してくれた数少ない遺産だな。

「いらつしやいませー」

やる気のない店員の挨拶を聞きながら私が入ったのは本屋だ。私は悲しい事に様々な事をこなしてしまえる才能を有している。だからどんなことをしてもすぐに飽きてしまうが本だけは違う。心を無にして読むことが出来るんだ。小説でも雑誌でもね。だから私は昔から本を読む癖が出来ている。

ふむ、今週のジョンPは休載が目立つな……。おや、新連載があるのか。これは見たことない本だな。新刊のようだ。読んでみるか……。

「……」

「……っ！」

そんな風に夢中になっていたせいだろうか？ 私は太ももが触られるまで不審者の接近に気付かなかった。

「っ！」

「おわっ!？」

不審者の手の動きからしゃがんでいると予測し、右足で薙ぎ払うように回転する。そうすれば後ろにいた不審者に右足が直撃し、軽く吹っ飛ばがこれで終わりにはしない。態勢が崩れた不審者をうつ伏せに倒すとそのまま右腕をひねり上げ、全体重を不審者の

背中に乗せる。

「いつ!? ギブギブ……!」

「店員さん! 不審者です! 警察を呼んでください!」

「え!? いやちよつと……!」

不審者が何か言おうとしているが黙っているという意味を込めて力を強めていく。声を出せなくなったのか抵抗する力も落ちてきたが構わずに拘束を続ける。視界の端でシヨツピングモールの警備員が向かってきているのが見える。後はこの不審者を突き出せば終わりだ。

全く、せつかく賞金が手に入って気分がよかったのに台無しだ。この落とし前は不審者に支払ってもらいましょう。

「あ! トレーナー何してんだよ!」

そして、不審者を警備員に引き渡していると遠くから近づいてくるウマ娘の姿が見えた。ああ、彼女の事は知っている。ゴールドシップだ。破天荒な行動が目立つが実力は申し分ない強力なウマ娘だ。そんな彼女がトレーナーと言っているという事はこの不審者はトレセン学園のトレーナーなんでしょう? トレセン学園はこんな不審者を野放しにしているとは……。

「何の騒ぎだよこれ」

「いや、実はな……」

「その不審者が私の太ももを触って来ました」

「……」

私の言葉を聞き警備員二人は冷ややかな視線を不審者に向けゴールドシップはあちやー、と言わんばかりに頭を抱えている。この様子を見る限りこの不審者はよく女性の太ももを触っているのだろう。なぜこんな人物がトレーナーになれているのか、本当に意味不明だな。

「……あー、それじゃ警察の人を呼びますので一緒に来てもらっていいですかね？」

「えっと、その……」

「いいですよ ね？」

「……はい」

「すみませんがそちらの、お嬢さんも詳細を聞かせてもらえませんか？」

「もちろん構いません」

断つてもいいがその場合は冤罪をかけたと思われる可能性もある。それはそれで面倒なことになりそうだしここは素直に受け入れておこう。それに、私としてもこの男に恨みはない。誠意を見せてくれれば被害届を出さずに示談で済ませてもいいと考えている。

さてはて、トレセン学園のトレーナーさんは私が望む誠意を見せてくれるのだろうか
……。見せられない場合は人生をもって償ってもらおうとするか。

第三話「人間とウマ娘」

「馬鹿じゃないの？」

その人物、同じトレナーであるおハナさんの辛辣な言葉に何も言い返せない。俺がシヨツピングモールでやらかしてから三日が経った。俺がセクハラ、にしか見えないがウマ娘の太ももを触ったせいで不審者として突き出されかけたが相手が求めた多額の金銭で示談を成立させることができた。おかげで俺は貯金をすべて失い今見ているゴールドシツプやウオツカからは蹴られまくってボロボロになりとどめとしておハナさんからの言葉を受けたわけだ。

「まあ、確かに貴方は見ず知らずの娘を触る癖はあるけど……」

「おハナさん、その言い方だと俺が変態にしか聞こえないんだが？」

「そうではないの？」

違う、といたいところだが何も言い返せないな。今回は初めてつかまりかけたわけだし次からは気を付けないとマジで両手に手錠を付けることになりそうだ。

「……それで？ 相手はどんな娘なの？」

「はつきり言つて三冠を狙えるやつだった」

おハナさんの目が真剣な表情になったから俺は？偽りなく答える。正直に言つてあのウマ娘、シユバルツカイザーはやばい。見た時からその名に恥じない王者の風格が出ていたし実際に触つてみればそれが風格だけではなく実力もあつてのものだと理解した、理解させられた。

「それほどなの？」

「ああ。はつきり言うが強者つていう言葉が似あうやつだった。見た時からだが触つた瞬間に俺は全てのウマ娘を引き離して勝利する姿が思い浮かんだ。恐らくだが勝負になるウマ娘は片手で数えられる程度しかないはずだ」

「……そんな娘が埋もれていたなんて。で？特徴はあるの？」

おハナさんもチームリギルというウマ娘達のトレナーだ。気になるんだろう。俺としてもごまかしたり？をつく理由はない。正直に話していく。

「黒髪にセミロングのストレート。表情はキリツとしていてとか素で王様っぽい雰囲気を出していたな。年はたぶん10代中ごろ。恐らくだがトレセンには通つていないがレースの出場経験はあると思う」

「？ レースには出ているのにトレセンには通つていない？」

「ああ、たぶんだが違法レースに参加しているんだろう」

違法レースの言葉を聞いておハナさんの顔が歪む。まあ、こんなことをいう俺の顔も

歪んでいるだろう。

違法レース。それは僅かな金を与えることでウマ娘達を見世物にする最低なレース場の事だ。そこにいるのは腐った金持ちどもにウマ娘を道具としか考えない主催者だ。更に参加するウマ娘も様々な事情により違法レースに出るしかない者ばかりだ。

「それはつまりそのウマ娘は何かしらのドーピングをしているってこと？」

「いや、違うだろう。恐らくだが素の実力だ。だから違法レースに出ているかもしれないといとしか言えないんだ」

「もしそうならトレセン学園に通えない理由でもあるのかしら……」

実力がありながらトレセン学園に通えない者は一定数存在する。そもそもトレセン学園が近くにいる、性格に難があつて受け入れてもらえなかった等大体が断念せざるを得ない理由ばかりだ。

それだけに彼女、シユバルツカイザーが何故トレセン学園に通わないのか理由がわからなかった。別に走れないわけじゃない。距離の問題でもないだろう。なら親に反対されている？ 違法レースには出ているの？ なら金のためか？ あり得る話だ。違法レースで勝てる実力者なら簡単に金を稼ぐことができる。

「どちらにしろもう一度会ったら話してみようと思つている。あんな脚質をもつた奴を違法レースで使いつぶすなんて勿体ないからな」

「あら？ 示談で済んだとはいえ不審者と認定された貴方が近づいたらまた警察が呼ばれるんじゃない？」

「……」

おハナさんの言葉に俺は何も言えない。実際、示談で済んだが次はマジで訴えられそう。彼女からはそんな雰囲気を感じ取れた。

「ま、まあ。流石に面と向かって話せばわかつてくれる、はずだ……」

「……そんなんで信用しろ？ 変質者が正面から来たって余計に警戒されるだけだしよ」

「そ、それはそうだけど……。ならおハナさんも一緒に来るか？ 俺から聞くよりも実際に見たほうがいいだろ？」

「……」

俺の言葉に悩みこむように黙ったおハナさん。流石に俺一人で行くより女性のおハナさんがいたほうが話がこじれることもないだろう。おハナさんだけで行かせてもいいがそれはそれで話を持っていくのが難しいからな。見ず知らずの人が一方的に情報を知っているなんて警戒させる理由にしかならねえしな。

「わかったわ。私としてもあなたがそこまで言うウマ娘が気になるもの」

「おっと、最初に目を付けたのは俺だぜ？」

「セクハラで訴えた人に教わりたいと思う娘がいると思ってるの？」
は、はは。おハナさんは本当に言葉がキツイぜ……。

そして、そんな二人には想像することもできないだろう。シユバルツカイザーの正体が大きすぎる特典を望んだ結果、前世の記憶を失った転生者であるなどは。何しろ本人すら理解していないのだから。そして、その結果としてウマ娘なら必ず持っている勝利欲求や競争意識と言った本能を失っていた。

そう、彼女は本当に走れるから走るだけなのだ。そんな彼女の事情を理解できるはずがないのだ。出来るとすれば本人か、この世界に転生させた神くらいだろう。だからこそ、二人がシユバルツカイザーへの説得のために用意したカード全てが無意味で終わることになるのはこれから少し先の事であった。

ウマ娘という存在は基本的に無駄に大飯ぐらいだ。中には人間と同じ量で済む者も

いるらしいが私は違う。最低でも一般成人男性の二倍は食べる。つまりコンビニ二行けばお弁当を最低でも二つは購入し、そこからおにぎりや総菜なども食べないと腹が満たされないのだ。

今でこそ違法レースで稼いでいるために食費には余裕があるがそれまではその日に食べる物に困るほどだった。もうあんな思いはしたいとは思えない。

さて、今日は予定もないし臨時収入示談金が入ったから例のショッピングモールにでも行こうと思っている。午前中はゲーセンで遊び、昼食はモール内の店舗を利用。午後は本を買って閉店時間まで読もうと思っている。つまり一日中モールで遊び倒すというわけだ。

しかし、それゆえだろうか？ 普段やらない一日モールで遊び倒そうとしたせいなのかは意外な人物たちに会うこととなった。

「お前がトレーナーが言っていたやつだな！」

「ごめんなさい。トレーナーが迷惑をかけたみたいね」

私の前には3人のウマ娘がいた。そのうちの一人は前回変質者……、トレーナーと一緒にいたゴールドシップだ。残り二人も関わり合いがわからないがどういった人物かは知っている。ダイワスカーレットにウオッカ。実力というのならゴールドシップに勝るとも劣らないウマ娘たちだ。

「この間はごめんナ。うちのトレーナーって職業柄あやつて確認することが多くてさ。別に女性に触りたいからしたわけじゃないんだよー」

「ええ、私はもう気にしてないので問題ありません」

誠意は見せてくれたんだ。これ以上話を蒸し返すつもりはない。だがこうして示談金を手に入れたせいだからまれていると考えると考えると立ちを感じてしまうな。

「……それより3人は何故ここに？ 学校はいいんですか？」

「何言つてんだ？ 今日日は曜日だぞ」

ああ、そうだったのか。道理で人が多いわけだ。どうもこんな生活を続けていると曜日の感覚がおかしくなってしまう。加えて気にする性格でもないから余計にな。

「そういうえばそうでしたね。3人は遊びに来たんですか？」

「まあ、正確にはスカーレットの服を買いに来ただけだな。こいつこの前新調したのにもうサイズ合わなくなつてさ」

「ちよつと!? 勝手に何言つてんのよ!」

ウオツカの言葉にダイワスカーレットが顔を赤くしている。……この反応から見て服は下着の可能性が高そうだな。確か中等部だったがまだ成長するのか。まあ、うらやましいとは思わないけどな。私だつてそれなりにあるしこれ以上成長するのなら邪魔にしか感じないからな。ちなみにサイズは87のDだ。日本における平均程度の大き

さだ。

「お、そうだ。お前も一緒に来ないか？ 皆で買い物したら楽しいしき！」

「それはいいわね。トレーナーの馬鹿がやらかしたお詫びも兼ねてね」

「……」

正直に言つてめんどくさい。だが態々絡む必要などはないが断る理由もない。別に悪い者達ではないし少しくらい遊んでも問題はないだろう。たまにはこういった経験をしておくのも悪くはないだろうしな。

「わかりました。それではご一緒させてもらいます」

「おう！ だったらその口調はやめて素の喋りでいいぜ？ 明らかに壁を作っているように聞こえるからな」

「……わかった。なら普通に喋らせてもらう」

「ええ、私もそつちのほうがいいと思うわ」

「おつし！ んじゃ早速どこに行くか？ スカーレットのブラが先か？」

「だ！ か！ ら！ なんて人前で言っちゃうのよ!!」

幼少期より何故かこの男口調が喋りやすかった。だから保育園や小学生の時は揶揄われる事が多かった。その度に報復をしていたからかすぐには揶揄ってくる奴はいなくなつて舎弟のような存在が大量に現れる結果となつていた。みんな高校に上がって自

分たちの青春を謳歌しているころだろう。

……そう考えるとこうしてゴールドシップ達と楽しむのも青春といえるのかもしれない。ならば今はこの時間を良い思い出に出来るように楽しむとするか。

第四話「接触」

正直に言つてあいつを最初に見たとき、アタシは思わず固まっちゃまったよ。あの日はトレーナーと一緒にショッピングモールに用事で来ていたんだけど気づいたらトレーナーはいなくなつていて少し離れた場所でウマ娘に拘束されていた。それを見たときは「ああ、いつものやつか」つて思つたけど今回は相手がガチで怒つていようで警察に突き出されそうになつていた。

さすがにトレーナーの行動は不味かつたかもしれないが一応はトレーナーなわけだし助けに行つたわけだが、そこでようやくそのウマ娘、シュバルツカイザーを目にしたんだ。

そして、直感でこいつはレースに出てはいけないつて理解した。別に弱いわけじゃない。むしろその逆だ。こいつは強い。アタシやウオッカ、スカーレットが相手でも余裕で勝利してしまえるだろう程に。だけど、こいつには覇気がない。正確に言えばレースに勝ちたいとか負けたくないつて気持ちがないんだ。別にアタシがそういう事に鋭いわけじゃない。ただ、こいつがそういう雰囲気を出しているんだ。少しでも鋭いやつなら簡単にわかつてしまうほどに。

だからこいつはレースには出てはいけないんだ。どんなレースでもこいつは勝ってしまう。出場する奴がどれだけの覚悟を、熱意を、覇気をレースに注ぎ込んでもこいつはそれに水をかけてしまう。そのうえで勝利する。多分気が弱いやつは心を折ってしまふような状況になるはずだ。

幸いにもこいつはトレセン学園に在るわけじゃない。走りこんでいるのは分かるがそうじゃない以上他のスポーツに参加しているのか……。

そんなわけで示談で済ませられたトレーナーを回収して帰宅したがその日はずつとあいつの事が頭から離れなかった。多分憧れや尊敬とは違ふ、多分熱にやられてたんだと思う。きつとアタシはあいつが走っているところを見れば目を奪われてしまったかもしれない。それを見たいとも見たくないとも思ってしまうんだ。

結局アタシは翌日以降も頭から離れなかったからウオツカとスカーレットが買物に行くつていうから気晴らしに来たわけだが結果、そこで再開するに至った。完全な偶然だったけどちようどよかったかもしれない。多少強引にだが一緒に遊ぼうと誘ってみた。幸いにも相手は少し悩んだ後に了承してくれたよ。見た感じ不快には思っていないみたいで安心した。

「うおおおおおおおつ!!!」

「なんのおおおおおつ!!!」

買い物を終えたことで時間ができたから今はゲーセンに移って遊んでいる。視界の先にはスカーレットとウオツカがエアホッケーで死闘を繰り広げている。ものすごい勢いでパックが動き回っている。お互いに0-0。決着は当分つきそうにないだろう。シユバルツカイザーは何をしているんだろうと思つて周りを見回していると太鼓を叩くりズムゲームをしていた。

「……」

無言で淡々と叩いていつているが画面は最大難易度に見えるんだけど？ 余裕でたたいているあたりかなりやべーじゃん。

「……ふう」

一曲叩き終えて満足したのかそれを続けることはなかった。得点は満点をたたき出していつているしランキングには堂々の1位で表示されている。

「もうやんないのか？」

「飽きた」

一言だけそういつて次のゲームに向かつていく。ああ、多分こいつにとつて今のは普通にできてしまう事なんだろうな。普通の奴が呼吸する、手足を動かす、それと同じ感覚なんだろう。ただそれらをするのが楽しいと感じる奴なんていない。それと同じ感覚なんだろうなあ。

「なら一緒に出来る物やろうぜ」

「……エアホッケーは埋まっているぞ?」

シュバルツカイザーの言葉にエアホッケーがおかれている場所を見ればいまだにスカーレットとウオツカが死闘を繰り広げていた。しかもお互い得点はない。つまりまだ1試合目ということだ。……もう10分以上やってるんだけどなあ。

「それじゃあそのダンスゲームやろうぜ」

「……」

ゲーセンの端に置かれたそれ、ダンスゲームを指させればシュバルツカイザーは露骨に嫌な顔をした。ダンス嫌いなのか? そう感じるがすぐに「わかった」という返事が返ってくる。……見る限りあまり好んでいるわけではなさそうだな。でもこいつがどんなダンスをするのか見てみたいという気持ちから1回やってみることにした。

「っ!!!」

「……」

そして始まればアタシはシュバルツカイザーに魅了された。カッコよさと可愛さ、可憐さと精強さがまるで一つに濃縮されたかのような動き。それはまさに全てを魅了するダンスだった。気づけばアタシたちの周り、というかシュバルツカイザーの周りには人だかりができていた。これはまるで小さなウイニングライブだ。

ダンスが終われば拍手喝采が起きる。ダンスゲームも勝者をシユバルツカイザーと称えるが当の本人はかなり嫌そうな顔で離れていく。その反応を見る限りこいつがトレン学園に通わない理由はこれみたいだな。人前でダンスを踊るのが、というより見せるのが嫌いなんだろうなあ

確かにこの様子を見れば何となく理解できるよ。普通ならファンがついてうれしいかもしれないがそれを苦痛に感じるならただこの光景は拷問以外のなにものでもないんだろう。正直に言つてすごく勿体ない。アタシだってウマ娘だ。こいつと全力を尽くして走り、勝敗がついた後はお互いの頑張りを称えあって同じステージで踊りたいたいと思ってしまう。多分こいつと一緒にのステージに立てば誰だってこいつの引き立て役になるだろう。だけどそれでもきつと一緒にのステージに立てたなら、それはどんなウニングライブよりも素晴らしいものになると確信できる。

「やっぱり、勿体ないなあ……」

アタシの呟きは歓声に吞まれて誰にも聞かれることはなく、かき消された。

「ひどい目にあった……」

ゴールドシップたちと一緒にショッピングモールを回ったわけだがゲーセンに行つて以降はただただ後悔しか感じなかった。ゲーセンとはいえ端っこにあるから大丈夫だろうと油断した結果私のダンスに魅了された者たちに取り囲まれる事となった。はつきり言つてうざつたことこの上ない。だがウイニングライブはこの比ではない人数に囲まれる事となるんだ。やはり表のレースに出るメリットはないな。だからといって違法レースもデメリットはデカすぎるがな。

「取り敢えず暫くは家でおとなしくしているのがいいか……」

「シユバルツカイザーさんですね？」

ふと、声を掛けられる。声のしたほうを見ればスーツ姿の男性の姿があつた。見覚えはない。記憶にもないから知り合いでも有名人でもない。だけど私の名前を知っていることから只者ではないだろう。少なくともナンパの類ではない。となると……。

「……誰だ？」

「私はU R Aの加藤と言います」

ああ、めんどくさい人物につかまつた。真つ先にそう感じた。周囲にそれっぽい者はいない。少なくとも付近にU R A関係者はこいつしかいない。となると少なくとも私を取り押さえるなどの行為ではなさそうだ。そうだった場合は警察なりなんなりいるだろう。だが私を知っている以上その一步手前、そう考えるべきだろう。

「何か用ですか？」

「あなたをトレセン学園にスカウトしたい。違法レースに出なくてもきちんと夢を見せられる」

「……」

なるほど。あそこが摘発されるのも時間の問題という事か。そして摘発される前に私を救い上げたいというわけか。目を見る限り本音で言っているっぽいがいづつは何を勘違いしているのやら。

「別にトレセン学園に通えないから違法レースに出ているわけではありませんよ。私は違法レースだから出ているのですよ」

「っ！ 違法レースは夢破れたウマ娘を食い尽くす場所だ！ 君のような才覚あるウマ娘がいていい場所ではない！」

「それは理解しています。ですが勝てるうちは食い物にされる事はありませんよ。むしろ食らう側です」

「今すぐやめるんだ！ 君はきちんとレースに出るべきだ！ 君ほどの才覚があれば無敗で三冠を摂る事だってできる！ シンボリルドルフすら超えるウマ娘になれるんだ！」

「ですから……」

「頼む！ その才能を腐らせないでくれ……！」

……正直に言つてうざい。イライラする。人の話を聞かない馬鹿との会話、いや会話ですらないか。一方的な要求は本当に頭にくる。

無敗の三冠？ それの何がすごい？ はつきり言おう。私の才能をもってすれば出走すれば確実に取れる程度のものだ。生まれた時から持つこのくそつたれな才能は本当に嫌になる事に負けようと思わない限り勝つてしまふ。いうなればオートモードで勝利するのだ。だからマニュアルで負けになるように行動しない限り私が負けることはない。別にこれは走る事だけではない。格闘技でも球技でもなんでもだ。個人の力では限界がある団体戦でもない限り私が負けることはない。

だから、無敗そんなものの三冠に私は興味などない。

「……では聞くが」

「っ!？」

「表のレースに出ること得られる私へのメリットはなんだ？ 私は榮譽などくそくらえだと感じている。他人に行動を制限されることも嫌いだ。生ぬるいなれ合いも好かん。他人のために行動する気などない。ゆえにウイニングライブをする気もない」

「それは……」

「答えられないか？ なら代わりに答えてやるよ。トレセン学園に通つた場合、メリッ

トとして食費に光熱費の心配がなくなる。大食らいの私にとってこれは大きなメリツトではある。次にU R A 付近のパイプを得られること。権力者とのつながりは大なり小なり持つていて損はないからな。最後に卒業前提だがトレセン学園卒という箔を得られる。これはのちの就職において有利に働くだろう」

だがどれもトレセン学園ではできないことではない。寮が存在する学校など腐るほどあるし偉い人とのパイプも必須ではないしその気になれば自力で作れるものだ。そして就職に有利という点も就職しなくてもいいように準備を進めている。この調子なら履歴書に中学卒業以上の事を書かないで寿命を迎えられる状態になるだろう。つまり卒業生という箔は必要ないのだ。精々が食費を全面カバーできるしか真のメリツトが存在しないのだ。

「次にデメリツト。ウマ娘はトレーナーの指示を受けながら練習をする。私にとってはデメリツトだ」

他人からの指図を受けたくはない。だからトレーナーとうまくいくわけがないんだ。もし練習の指示を出されれば私は物理的に黙らすか社会的に抹殺して口を閉ざさせるなりをするだろう。中学生まではそれでうざったいガキどもを一掃してきたからな。

「その2。レースに出ることだ有名になる」

レースに出れば先の説明通り負けようと思わない限り勝利できる。そうなると私は

有名人の仲間入りだがそれは面倒なことしかうまない。実際、有名人を見ればわかりやすいだろう。素顔をさらして街を歩けば気づかれた時点でアウト。人に囲まれる事となる。それならやめてくれと言えばいいだけの話と考えるかもしれないが素直にやめてほしいと言って全ての人間が言うことを聞くか？ 大抵は無視して近づいてくるだろう。写真を撮られ握手を求められる。面倒くさいことこの上ない。

そしてマスゴミに分類されるジャーナリストなら私の行動を監視して少しでも叩けるところを見つければそれを拡大解釈して盛大にばらまくだろう。そんなのはごめん。他人からの評価など気にしないがだからと言って悪く言われていら立ちを感じないわけがないのだから。

「その3にして最大のデメリットがウイニングライブに出ないといけないことだ」

ファンサービス？ 何故必要なんだ？ 私が走るのにファンが一体何を？ 金でもくれるのか？ それはもはや風俗と変わらない。そんなのは死んでもごめん。私は何故か男を恋愛対象に取れない。というよりも汚らしい汚物に感じることもある。ほど男への価値観が低すぎる。むろんそう感じる者ばかりではない。目の前の加藤だつてそうだし違法レースの主権者も屑だが汚物ではない。だが、一度だけ見たウイニングライブに来ていたやつらの大半は汚らしかつた。たとえるならありとあらゆる汚物に囲まれて笑顔を振りまくようなものだ。とてもではないが発狂しない自信はない。

「その4。私という異常性のあるウマ娘が混じることで発生する不協和音に巻き込まれる事」

レースに熱意を持たない私をウマ娘はよく思わないだろう。テストで例えてみよう。学校のテストで努力して60点を取っている者達の中で100点を取るやつがいる。そいつは勉強を一切しないどころかそれを無駄と断定して好き勝手に行動する。それで良い感情を持つか？ 更に言うのならそこが東大のような場所なら余計に。なんているんだ。いなければいいのにと誰だつて感じるだろう？ そうなれば私に突っかかってくる者が出てくるだろう。一度や二度ならいいがそれが何度も起こればどうだろう？ めんどくさいだろう？

「その5。授業が存在すること」

これは今言ったテストの例えに似ているが私にとって授業とは退屈な時間だ。別に学ばなくても教科書を見ていれば暗記が可能だ。知っている事、それも興味がないものを一時間にわたり延々と説明されるんだ。知っていることの説明を聞くことはただただ苦痛にしか感じない。いらだちを生み出し怒りを呼び起こす。そんなことをしてまで聞く価値があるか？

「……ほかにもこまごまとしたデメリットがあるがとりあえずこれくらいでいいだろう」

「……」

さて、加藤と名乗った男の様子は……。ああ、顔を青くしているな。どう反論すればいいのかわからないだろう。そうなるように言ったからな。

「意味はないが改めて聞こう。私がトレセン学園に通うメリットはあるか？」

「そ、それは……」

加藤は何も答えられずに口ごもる。ま、そうだろうな。予想通りの反応だ。

「ないだろう？ 次から声をかけるんだったら私が納得できるメリットを用意してくるかデメリットがなくなるようにしてくるんだな。それまで声をかけるなよ？ 鬱陶しただけだから」

それだけ言って私は再び歩き出す。そんな私を加藤が追いかけてくることはなかった。

第五話 「出会い」

URAの職員のスカウトを断つたがだからといって私の生活が何か変わることはない。しいて言うのであれば違法レースに足を向けなくなっただけだ。あの様子から私が出場していた違法レースは警察にマークされていると考えていい。そんなところに態々出場する真似はしない。これまで貯金してきたために暫くは遊んでいても問題なくらいの金銭を持っている。潜伏しても問題はないしなんならそれ以外の方法で稼げばいいだけの話だ。

「……」

そんなわけで私は今近くのファミレスにきている。ここは平日の昼間はほぼ人がおらず店内はとても静かだ。もくもくと作業するにはこれほどうってつけの場所はない。早めにランチを食べてからはずっとパソコンとにらめっこをしている。私がしているのはIT関連のバイトだ。高いスキルが求められるがその分支払いも高いバイトだ。すでに4件のバイトを完了して5件目を半分完了させようとしている。

「あれ？ あなたは……」

「……」

ふと、声が聞こえたほうを見ればトレセン学園の制服を着たウマ娘がいた。桃色の髪をした元気という言葉が似あうウマ娘だが生憎私の記憶に彼女の情報は無い。少なくとも有名でも実力者というわけでもないだろう。

「何か？」

「あー！ お仕事だったのにごめんなさい！ とても綺麗な髪だったから」

少なくとも彼女には私は成人しているように見えるのか？ 確かに凛々しいという言葉が似あう姿をしていると思つてゐるがさすがに5つ近く上に見られるのはあまりいい気分ではないな。それともこの場合は大人っぽいとポジティブに受け取るべきなのだろうか……。

「学校の帰りですか？」

「帰りではないかな。寮に住んでいるけど外でトレーニングしようと思つたけど少しおなかがすいちゃつたから」

「ここに寄つたというわけですか」

そのウマ娘は隣の席に座りながら事情を話してくる。流石はトレセン学園のウマ娘。トレーニングに余念はないようですが……。

「……失礼ですがレースの戦績は？」

「……あー、実はわたし一度も勝つたことがなくて……」

えへへと笑う彼女の様子に私はそうだろうなと感じている。見る限り彼女は勝てるウマ娘ではない。勝つのに必要な才能が一切存在しないと云つてもいい。恐らくどれだけ頑張つても一回だけ1着を取れば手放しでほめてあげられる程度の実力者だ。

「見る限り貴方に才能はないようですね」

「……」

「トモは丈夫そうですが前に進むための筋力が足りません。努力不足というよりもキヤパシテイの限界点が低いというべきです」

その点でいうのなら短距離向けの肉体だ。中長距離は無駄に敗北を重ねるだけのものではない。私ならパワーとスピードに特化して自分の適性と相談しながら逃げや差し、追込などを決めていくだろう。

気づけばそんなことを口走っていたがふと隣のウマ娘の顔が下がっていることに気づいた。少し言い過ぎたかとも思ったが次の瞬間、

「すごいー！」

ウマ娘に抱き着かれるように手を握られていた。突然の事に困惑するが表情を見る限り悲しみや怒りは感じずにきらきらとした目を向けてくる。

「……までわたしの事を評価してくれた人は初めてです！」

「そ、そうですか……」

「そんな貴方にお願ひがあります！　どうかわたしにトレーニングをつけてくれませんか!？」

「え？」

「私、まだ未勝利戦に勝てなくて、専属のトレーナーがいらないんです！　だからどうしても一人でトレーニングをしないといけないんですけどそれだと限界があつて……」

なるほど、確か未勝利戦は一勝もできないウマ娘のみが出走できるレースだ。そこでも勝てないととなると筋金入りといえる。大抵はトレーニングを積み比べ比較的簡単に勝てるレースなのだ。何しろ出走者は敗北しか知らないウマ娘なのだから。

「だから貴方のような指示は初めてだったんです！　お願いです！　少しでいいので！　時間がある時でいいので指導してください！」

「……」

正直に言つて断りたい。メリットはないうえにデメリットしか思いつかない案件だ。相手が学生である以上金銭による取引も難しい。ただただ時間を浪費するだけになる。

だが、受ける場合このウマ娘の実力は格段に伸びる。何しろ頭の中ではすでにトレーニングメニューが思い浮かんでいるのだから。このウマ娘をよく知らない状態で出てくるメニューをきちんとこなした場合、G1程度にはなれるかもしれない。まあ、レースに出る気はなかったからその辺の知識がないから具体的に答えるのは不可能だがな。

少なくとも全戦全敗から勝率3割程度にはできるだろう。あとは本人の才能を見ないことには何もいえないな。

「……そのお願いを受けた場合の私のメリットはなんでしょうか?」

「え?」

「まさか私に利益がないのに受けてでも思っているのですか? 私はそんな善人では

ありませんよ?」

「……」

このウマ娘には悪い、かもしれないが私は善人ではない。態々めんどくさいこれを受けようなんて思えない。だからこそ、私を納得させられる理由を……。

「勝ちます!」

「……?」

「わたし、今まで負けても常に笑っていました。レースに出られればそれでうれしいです。だけど、教えてくれるのならわたしは本気で勝ちます! 絶対に教えてくれた事を糧にしてそれを十分に発揮してレースに勝ちます!」

「……」

私はメリットを提示しろといった。だが、これはなんだ? 普通なら断るのが当然の言葉だが目が離せない。彼女の瞳に燃える、闘志と呼べるそれから……。

「……わかりました。素人ながらできる範囲で頑張りますよ」

「っ！ 本当ですか!? やったー!!!」

ウマ娘はここが店内という事も忘れて大きな声を上げている。だけど私はそんな彼女を無視して無意識に了承していたことに驚いてしまっている。受ける気はなかったのに何でだ？ 彼女に何かを感じたからか？ いや、どう見ても彼女に感じるものはない。では私の内面の問題か？ 彼女が好みの見た目だった？ いやそういうわけでもない。じっくりと見ても可愛い容姿をしている程度にしか思えない。ならばなんだ？ 何故なんだ？ こんな一勝もできないのにヘラヘラ笑っているウマ娘を……。

……ああ、そうか。

まぶしいのか。羨ましいのか。私は。ただ走るだけで楽しいと感じられる彼女が。勝てなくても笑顔でいられる彼女が羨ましいんだ。

私は意識的に手を抜かない限り負ける事がない。だから一度も走ることに情熱を持たず、楽しいと感じたことはない。どれだけ走っても気づけば私の前を走るものはおらず、興奮も熱狂もない。

そんな私だからこそ彼女の在り方がまぶしく見えたのだろう。その笑顔の理由を勝利したからにしたいのだろう。彼女を、勝たせてみたいと思ってしまったのだろう。

「……では早速始めましょう。ジャージはありますか？」

「えっと、寮にあります……」

「ならばとつてきてください。今日は時間も時間なので簡単な確認と練習を行いましう」

「は、はい！　ありがとうございます！　あ、わたしハルウララって言います！　これからよろしくお願いします！」

そう言つて彼女、ハルウララは店を飛び出していった。寮にジャージを取りに行つたのだから行動が素早い娘だ。騒々しいがそれがどこか心地よくもあるな。

……さて、やると決めた以上徹底的に彼女を鍛えてあげないと。私の脳内は既にレーニングや今後の行動計画を練り上げ始めている。恐らく彼女が戻ってくるまでには完成し、ハルウララが泣きべそをかいてしまうようなハードなトレーニングが出来上がっているところだろう。だけどそれくらいはクリアしてもらわないと。私に教えを乞うたのだから耐えてレースに勝てるウマ娘になってくれよ？

私は気づかぬうちに笑みを浮かべながらハルウララの到着を待つべく会計を終わらせるべくレジの方へと歩いていくのだった。

第六話「ハルウララ」

—ハルウララ。悪いがこの調子なら今年度にはトレセン学園を去ってもらうことになるかもしれない。

わたしはその言葉を聞いた時、絶望や驚愕のほかには納得の感情も抱いてしまった。だってこのトレセン学園に、うん。トレセン学園に通う前からわたしはレースで勝った事がなかった。それでも走るのは楽しいしレースに出られるだけでもわたしは満足だった。

だけど、トレセン学園はそう判断してくれなかったみたい。わたしは、成績を残さないと辞めさせられることになってしまった。

『……』

『ウララさん……』

気づいたらわたしは部屋に戻っていてルームメイトのキングちゃんに抱きしめられて頭を撫でてもらっていた。目からはたくさん涙が……。うん、すぐくつらくて悔しいや。

わたしだってこのままじゃいけないって事は理解していたつもり。入学してもうす

ぐ2年。それだけの時間が経つてゐるのに未勝利戦で勝てないウマ娘はウララだけ……。みんな勝つたり、その、勝てないと思つちやつた娘はトレセン学園をやめて行つちやつた。いつもその背中を見送つていたけど今度はわたしが見送られる側になるのかな？

……それは、すごく嫌。もつと走りたい。もつとレースに出たい。みんなで楽しみたい！

だけど、それができる実力がわたしにはない……。

いっぱいトレーニングしていっぱい勉強したけど駄目だった。だつてみんなも同じくらい、もしかしたらそれ以上のトレーニングをしているんだもん。でも未勝利戦を突破できないとトレーナーが着く事やチームに入る事は出来ない。私は、自分の力を引き出せるトレーニングを学ぶ前の段階で躓いちやつてる。これじゃ努力しても無理だよね？

—見る限り貴方に才能はないようですね

—トモは丈夫そうですが前に進むための筋力が足りません。努力不足というよりもキャパシティの限界点が低いというべきです

でも、そんなときにあつたのがあの人。漆黒の髪のウマ娘。多分私よりも少し年上なあの人は一目でわたしの状態を見抜いた。トレーニングを続けたことで何となく察

しつづあったわたしの欠点をあの人は見ただけで当てた。

だからわたしはあの人に指導してほしいとお願いをした。見る限りトレーナーどころかトレセン学園の人じゃないあの人にこんな事をお願いするなんておかしいかもしれないけどわたしの周りで初めて、わたしの事を理解してくれた人だった。

迷惑かも、ううん。絶対に迷惑をかけているって事は分かった。だけどわたしだっけでもう後がない。結果を出さないとわたしはトレセン学園にいる事は出来ない。わたしは、ウララは、レースをもっと楽しみたい！ そのためならわたしは1着を絶対に取りに行く。それが楽しくなくて辛いだけのものだったとしてもそのあとにある楽しいことがあるならわたしは乗り切って見せる！

——…：わかりました。素人ながらできる範囲で頑張りましょう

そして、わたしはあの人の、シユバルツカイザーさんから指導してもらえることになった。それがとてもうれしくてつい大声をあげちゃった。だけどそれだけうれしくて、暗闇の中に光を見た気分になったの。

「絶対にもものにして未勝利戦に勝つ！」

わたしは確かな覚悟と闘志を胸に感じながらシユバルツカイザーさんの指導を受けるためにもジャージに着替えるべく寮へと走っていった。

不思議とその時はいつもより早く走れたかもしれない。

ひよんなことから弱小ウマ娘ハルウララのトレーナー擬きをすることになったが早速後悔しかけている。

ハルウララがジャージに着替えて戻ってきた後、私たちはファミレスから場所を移して近くの公園に来ていた。ここはウマ娘がトレーニングできるようにとそれなりの広さに加えてウマ娘専用レーンが存在していた。だからここでハルウララの詳細なスペックを確認していたわけだが……。

「ハルウララ。改めて言いますが貴方に才能は有りません」

そう、ハルウララはトレセン学園に入学してきたのが間違いだといいたくなるほどの走る才能がなかった。適正は芝が苦手どころかわざとかといいたくなる醜態っぷりをさらし、ダートに適正があつたのが幸いだけどそれ以前にひどすぎるスタミナ。パワーと速度もあれなのに他がひどすぎて優秀に見えるレベルだった。このスペックなら確かに未勝利戦すら勝てないというのも頷ける。多分だが私がハルウララに負ける場合は彼女の適性が高いダートの短距離且つ私が早歩きくらいの速度でないと勝てるほどだ。

「そして残念ですが芝を走る事はお勧めしません。恐らくあなたでは勝利どころかブー

ビーにすらなれない悲惨な結果しか残らないでしょう」

「それは……、はい」

彼女も思い当たる点があるのだろう。私の言葉に素直に返事をしている。だけど返事だけではどうしようもない。ここからどのようにするかですがハルウララがジャージに着替えに行っている間にある程度のトレーニングメニューは考えており、結果をもとに修正していつでもできる状態にしてある。

「まずは今後のハルウララ、あなたがどのようなウマ娘となるかを話しましょう」

「? どういう事?」

「どのような走り方をするのかってことですよ。貴方はこれ以上頑張ってもスタミナが増えることはないでしょう。あっても微々たるものでないよりはマシ程度でしょう」

「は、はい……」

「なので今後はパワーとスピードを重点的に伸ばしていきます。これら二つは物足りないですがスタミナよりも伸びしろは十分にあるように思えます。その結果を踏まえて貴方はダート専門の短距離型という事になります」

むしろそれ以外の走りをすれば惨敗という結果がたたき出されるだけだ。それだったら得意な分野に絞っていく方が何倍もいい。

「逃げや差し、追い込みなど色々ありますが何か希望はありますか?」

「えっと、わたし。その、あまり頭で考えるのは苦手で……」

「ならば逃げか追い込み……、いえ。恐らく逃げが無難でしょうね」

とはいえ逃げは後半にバテて馬群に飲み込まれてそのまま上がってこれないケースがある以上スタミナ配分は必須だ。要は頭を使わずに勝つなんて都合のいい事は出来ないが逃げならスタミナの配分をしなくても何とかかなりやすい。ほかだと仕掛けるタイミングを見計らう必要もあつて面倒だが逃げなら一着を死守するだけでいい。精神力においては他のウマ娘よりも高いといえるハルウララなら気力で走ることでもできるかもしれない。

「逃げ……」

「それ以外だと頭を使う必要が出てきます。勘で行けるほどレースは甘くはないですし貴方に才能は有りません。では早速トレーニングを始めましょう。まずはパワーをつけることから始めましょう」

「っ！ はい！」

スタートと同時にパワーを全開に馬群を超えて先頭に立つ。ハルウララのパワーならそれができる。あとは彼女の努力と精神力次第だな。次の未勝利戦が何時かは知らないがそう頻繁に行われるものではないはずだ。少なくともひと月程度の余裕はあるだろう。だからそのひと月でレースで勝利できるように全てを仕込む。そうである以

上ハルウララには本当に血反吐を吐いて頑張ってもらわないといけないからな。精々勝利の糧になるように死ぬ気で努力してくれよ？

第七話 「衝撃」

意外と何とかなるもんだなと、ハルウララの走りを見ながら感じる。指導を始めて三か月。意外とハルウララは走れるようになっていた。スタミナは全くついていないが瞬発力にスピード、パワーは桁違いに増えている。最高速度もかなり更新し、スピードだけなら十分すぎる状態となった。これなら未勝利戦は圧勝できるだろう。私としてもここまで指導した甲斐があつたというものだ。

「ふむ、やはり逃げはダメか……」

そして意外なことに、と言つていいのかハルウララは逃げや先行の才能がなかった。それこそスタミナと同じレベルの才能のなさだ。とてもではないが成長の余地はなかつたために差しや追い込みをやらせてみたがこれが中々光るものがあるように感じた。本人がいつも後方にいたために見慣れた光景で落ち着くのかそれとももとの才能ゆえか……。

「ハア……ハア……。どう？ 成長、してる？」

「それはこの結果を見てみればわかりますよ」

そう言つて私はストップウォッチを見せる。そこに表示された数字は指導初日に計

測したタイムより、数秒早かった。確かな成長を覚えてくれるものだった。

「っ！ やったやったー!!」

「レースでこれだけ出せれば1着も十分可能でしょう」

無邪気に喜ぶハルウララに更なる朗報を伝える。三冠どころかGⅠも厳しいかもしれないが1着を取り、そこそこなウマ娘として歴史に残せる程度には育った……、いや。その土台ができたというべきだろう。ここから伸ばせるかは今後の本人次第だ。

練習を重ねるうえでハルウララとは約束した。指導する期間を次の未勝利戦が行われる前日までと。そして今日がその日だ。つまりハルウララはぎりぎり指導をものに出来たというわけだ。それだけ彼女の覚悟が本物で努力を絶やさなかったから得られたものだ。

気づけばハルウララからは敬語が消えていた。年齢が2歳しか違わないと判明したためだろう。私としてはそれでもかまわないがこちらが敬語を崩すことはなかった。私が素を出して話すのはほとんどいない。せいぜいが違法レースの主催者だが別に親しいからではない。取り繕う意味がないからというだけの話だ。

「では私の指導はこれで終わりです。明日に備えて今日はじっくりと休んでください。休息を取らないと疲れが抜けることはありません。それで未勝利戦で負けたとなつては目も当てられませんから」

「うん。そこは理解しているから大丈夫!」

そう言って笑っているハルウララだったが退学の危機というのは思いのほか焦りを生んでいたのか最初の方は寝る間も惜しんでトレーニングを行っていた時もあり、その時は数日間休みを取らせないと脚を壊しかねないほど危険な状態になりかけていた。ハルウララも過酷なトレーニングをしすぎて走れない体になるのは本末転倒であると理解できたのかそれ以降休みをきちんととるようになっていた。

そんなわけで彼女が休みを取らないで失敗するという事はないだろう。問題は緊張や興奮で眠れないという可能性が若干存在する事だがその時はそうならない心を落ち着かせてほしいものだ。

「では私の指導は今日をもって終わりです。少しは役にたてましたか?」

「もちろんだよ! 多分、わたし一人じゃここまで成長は一生できなかったと思うから……」

そう言ってどこか自嘲するような笑みを浮かべるハルウララ。トレーニングを続けるうえでハルウララの雰囲気はどこかおかしくなっているとは思っていたが時々か見せないうえに体に影響するものではないから放置していた。カウンセリングをするようになれば更なるかわりを持つことになる。そこまで彼女に時間を尽くす理由がないからな。あくまで私たちの関係は指導をする者とされる者。それ以上でもそれ以

下でもないのだ。

……でも、この三か月で確かにハルウララに情を持ったのも事実だ。きつと今後何か理由がない限りレースではハルウララを応援するだろう。それだけ太いつながりを持った彼女に未勝利戦に勝てるように本当の理不尽を教えてみようと思う。

「……では最後にアドバイスというか未勝利戦に挑むうえでプレッシャーをなくしてあげましょう」

「え？ それっていったいどういう……」

私はハルウララの言葉を最後まで聞かずにその場から走り出した。さあ、ハルウララ。ウマ娘としてすべてにおいて異端であり、神に祝福されたとしか思えない才能を見せてあげよう。しっかりとその目に焼き付けるんだ。

三か月前に指導をしてほしいと頼み込んだ相手、シュバルツカイザーさんは本当にすごかった。だってトレーニングをすればするほどウララの力が高まっていくのが分かった。多分ほかの人に比べれ微々たる程度の成長かもしれないけど全然成長できなかつたわたしにとっては初めて感じられる努力したことによる成長。それがとてもう

れしかった。

そしてシユバルツカイザーさんは、指導は素人だと言っていたけどそう思えないほど指導の仕方が上手だった。わたしはそんなに賢くなくて理解力がないって言われているけどわたしにも理解できるわかりやすい内容だった。だから最後まで分かったうえでトレーニングができていた。

長いようで短い、薄いようで濃密な三か月のトレーニング。それでわたしは未勝利戦に勝てるだけの力を得られたと思う。少なくともこの時期の未勝利戦なら勝てるだけの力が。もうすぐ今年度が終わるこの時期、未勝利戦に出るウマ娘はどれもレベルが低い。そういわれている。だって強い人はみんな最初の方に未勝利戦を終わらせるんだもん。だから時期によっては未勝利戦が行われなときもあるって聞いたことがある。シニアクラスにいる、シンボリルドルフさんが入学したときがまさにその時期だったらしい。だから今も未勝利戦ができる今年度はそれだけ強いウマ娘が少なかったという事、になるのかな？ どっちにしても負けたら終わり。だから頑張らないと。

「……では最後にアドバイスというか未勝利戦に挑むうえでプレッシャーをなくしてあげましょう」

「え？ それっていったいどういう……」

そして、最後の走り込みを終えて指導が終わったと思ったけど最後にシユバルツカイ

ザーさんはそう言って、走り出した。でも、本当に走り出したのかな？ だって気づいたら目の前から消えていたんだもん。そして遠くを見てシユバルツカイザーさんがすごいスピードで走っているのが見えた。

早い。ただただ早い。まるで車が走っているみたいな速度だった。そして、シユバルツカイザーさんはそのままダートコースから芝コースに速度を落とさずに場所を移した。

「……」

ああ、すごいや。あれが才能なんだろうなあ。そう感じてしまうほどすごかった。ダートと芝。速度を変えずに走ったシユバルツカイザーさんが速度を落としながらこちらに戻ってきた。顔を見てみれば汗一つかいていないで涼しげな表情をしている。その表情が本当ならシユバルツカイザーさんは合計4000m程度を走るなんて余裕ってことなんだろうなあ。

「……どうでしたか？」

「す、すごい……」

私が出したのはたったそれだけ。それだけしか言えないほどシユバルツカイザーさんの走りは圧倒的だった。多分、どんなウマ娘でもシユバルツカイザーさんに勝つことはできないと思う。そう思ってしまうほどの強さだった。

だからこそ、わたしの心はいつの間にか興奮という感情で埋め尽くされていた。嫉妬でも羨望でも感動でもない。まるで神様に出会ったみたいなお興奮だった。

「……そうですか。見ての通り私の走りを見せました。今のをよく覚えておいてください。そうすれば未勝利戦であなたが敗北することはあり得ませんよ」

「う、うん……」

シユバルツカイザーさんの言葉がどこか遠くから聞こえてくるし、とつても心地よい音色に聞こえる。

「ハルウララ。私はあなたの勝利を願っていますよ」

「は、はい……」

そこからの記憶はわたしにはない。気づいたら暗くなった寮の部屋のベッドで横になっていた。あれ？　って思ったけど時計を見れば良い時間だったからそのまま眠ることにしたけど、わたしに一体何が起こったんだろう……。

でも、明日は大事な未勝利戦だしここまで指導してくれたシユバルツカイザーさんのためにも絶対に勝たないと。そしてもつとここでいっぱい、走って……、楽しむんだ……。